パリ一九三三年　トラウマ治療の挑戦[1]

森　茂　起

オリエント急行

一九三三年三月一日水曜日の朝九時三〇分、長い旅を終えたエリザベス・サヴァーンは、オリエント急行からパリ東駅プラットホームに降り立った。[2]この時サヴァーンは五三歳である。プラットホームには、ここしばらく一刻も早くブダペシュトを[3]離れるよう促す便りを書き続け、この日を心待ちにしていた一人娘、マーガレット[4]が出迎えていた。

エリザベスがブダペシュトからオリエント急行に乗り込んだのは、前日二月二八日の朝である。[5]エリザベスの目にどれほど止まったか不明だが、その日、駅のキオスクに並ぶ新聞の第一面には、前日夕刻にベルリンの国会議事堂が放火され、オランダ人共産主義者が容疑者として逮捕されたことを知らせる文字が踊っていた。[6]ブダペスト駅でもこのニュースが人々の口に上っていたに違いないが、その後のおぞましい展開まで予想したものはまだ少なかったであろう。

当時のオリエント急行の様子はアガサ・クリスティの小説『オリエント急行殺人事件』に描かれている。映画化作品がよく知られているのでその映像が思い浮かぶ読者も多いだろう。クリスティが同小説を書いたのが一九三三年なので、エリザベスの乗った列車の車内は小説に描かれた作品に登場する列車と変わらなかった。[7]ただしエリザベスが乗り込んだのが一等車両であったかどうかは不明である。エリザベスには長くブダペシュトに滞在する財力があった一方で、最近それも底をついていたからである。

エリザベスを乗せた列車は、ブダペシュトを出発すると東に向かい、二時間強でオーストリアとの国境を越え、国境の町ニッケルスドルフに到着した。かつてはオーストリア＝ハンガリー帝国として固く結びついていた両国も、ハプスブルク帝国が崩壊することで分離してからすでに一五年目に入っていた。しばらく停車したあと一時間半ほど走ると、午後二時半にはウィーンに到着した。かつて大帝国の中心にあったウィーンも、当時のオーストリアにあっては東の端に位置する。ハンガリー国境からは早かったが、ウィーンを出てリンツを経由しドイツ国境近くのザルツブルクに到着する頃には、すでに夜八時近くであった。

エリザベスがオーストリアの車中にあったこの日の間に、ドイツでは、国会議事堂放火犯を巡る陰謀が進んでいた。朝の新聞の段階では、捕らえられた共産主義者の犯行という情報のみであったが、それに乗じて、ヒトラーが共産主義者の共謀によるものと決めつけ、共産主義者の抹殺へ突き進んだのである。[8]そして、暴力の対象は社会民主党にも広がり、まもなく強制収容所の開設が始まる。ヒトラーは、前月一月三〇日にヒンデンブルク大統領の下で首相に就任して以来、権力掌握への手立てをすでに次々打っていたが、まさにこの日からその凶暴性を露わにしたのだった。

しかし車中の乗客はまだその展開を予想できない。ドイツ人乗客たちは国会議事堂炎上のニュースを知り不安に包まれていたことだろう。[9]ドイツに入ると、ミュンヘン中央駅には夜の一〇時前に到着した。ドイツ国内の状況を知るため、乗客からミュンヘンからの乗客に質問が投げかけられたことだろう。どのような会話が交わされたにせよ、すぐあとの三月五日に行われた国会議員選挙でナチス党が圧倒的支

持を得たことを考えると、すでにヒトラーを支持する声は少なくなかったに違いない。事の成り行きを恐れて口をつぐんでいた共産党支持者もあったかもしれない。

しかし、エリザベスには乗客たちの会話に耳を傾けるゆとりも、ましてやオリエント急行の旅を楽しむゆとりもなかった。彼女にとってブダペシュトとの別れは「まったくの挫折」[10]であり、心も体も疲れきっていたからである。

彼女が、ブダペシュトに滞在していたのは、精神分析家、シャーンドル・フェレンツィの分析治療を受けるためであった。七年前にフェレンツィをはじめて訪ねて以来、幾度もブダペシュトに長期滞在し、フェレンツィの分析治療を受けてきた。フェレンツィがリスニャイ通り一一番地に居を構えてからは、週末を除く毎日、その家に続く坂を登って[11]通い続けた。しかし彼女には、今フェレンツィとの治療が終わったこと、ブダペシュトを訪れることはおそらくもうないことが分かっていた。何しろ、ここしばらくは、健康状態が悪化していくフェレンツィとの分析をどう終わるかが治療の課題であった。それはもはや、フェレンツィから治療を受けているとも言えない状況だった。その様子を知ったマーガレットは、エリザベスを引き止めるフェレンツィに怒り、少しでも早くパリに来るよう母親に迫るのだった。

列車が夜のドイツを東に進み、フランスに入って国境の町ストラスブールに到着した頃には、すでに朝方の四時を回っていた。早い朝食が供される頃には、故郷パリに戻るもの、家族との再会を心待ちにするもの、パリの地で予定する仕事のあれこれを考えるものと、乗客たちはそれぞれの到着に備えていた。

プラットホームで母親エリザベスと再会したマーガレットには、母の健康がすぐれないことがすぐ見て取れた。募る話もそこそこに、二人はシテ島のオリレアンズ通り二八番地のアパートに向かった。

マーガレットがパリに滞在していたのは、バレエダンサーとしてパリで活躍していたからだった。ダンサーとして十代からすでに舞台に立っていたマーガレットは、アメリカでの成功を経てニューヨークにバレエスクールを開校したが、一九二九年一〇月に起こった大恐慌によって閉校せざるを得なかった。そして、ヨーロッパ大陸のバレエへの関心と、ブダペシュトに滞在する母親と生活をともにしたいという二つの理由からであろう、ブダペシュトでダンサーの仕事を見つけることから始め、ロンドン、パリと活動の場を広げていた。それぞれのキャリアを積みながら離れて暮らすことが多かった二人にとって、母国を離れてヨーロッパに滞在していた期間はむしろ互いを身近に感じることができたであろう。マーガレットが母親の治療の進展、いや行き詰まりを逐一知ることができたのも、パリに住んでいたからに他ならない。

マーガレットのアパートでの二人の会話は、エリザベスのフェレンツィとの別れの状況とマーガレットの近況を巡って交わされただろう。マーガレットは、エリザベスの健康状態が思わしくないことをあらためて実感し、それがフェレンツィの治療の失敗によるものと考えた。実際彼女は、すぐさまフェレンツィに怒りの手紙を送りつけたが、フェレンツィからの返答はもはや期待できなかった。[12]

二人の会話に登場したに違いないもう一つの話題は、前年からエリザベスが書き進めてきた著作である。本が完成しつつあることは、二月に入って、フェレンツィとの分析を終えることができそうだと伝えたときにすでに知らせていた。マーガレットは、ブダペシュトを離れる母親の決意を喜び、二月一三日付けの返書を、「本とそしてすべてに万歳」[13]と締めくくっていた。

『自己の発見』[14]と題してこの年の秋に出版されたその本は、エリザベスが心理療法家として積み上げてきた知識、経験、思想の集大成である。彼女が自らの実践に「心理療法」と名付けてから二二年、治療者として実践を始めてからであればすでに三三年が経過していた。[15]

母と娘

エリザベスは、レオタ・ロレッタ・ブラウン Leota Loretta Brown として、一八七九年一一月一七日、アメリカ合衆国、ウィスコンシン州、ミルウォーキーに生まれた。[16]父親ブラウンは犯罪に手を染め、娘への虐待を繰り返す男だった。子ども時代に受けた虐待によってエリザベスは心身に様々の症状を抱えて生きてきた。[17]一〇歳の頃に父親が姿を消してからは母との二人暮らしになったがエリザベスの母親については、直接知るマーガレットが祖母について「どっちかと言えば愚鈍」[18]と語っ

た言葉があるくらいで情報に乏しい。おそらくは、もともとの弱さの上に夫の暴力で無力化され、自らも娘も守ることができなくなっていたのであろう。

夫が去ってから生計を支える力は母になく、エリザベスは若くして働かねばならなかった。何歳の頃からか、彼女は百科事典の訪問販売を始める。何も手に職を持たない少女の働き口として珍しくない選択肢だったのだろう。訪問を重ねるうち、彼女は、顧客の信頼を容易に勝ち取る力が自分にあるのを発見した。初対面の人とも容易に打ち解け、顧客は彼女との雑談を楽しんだ。そして話が弾むうちに、悩みを打ち明けられるのだった。彼女の対応は、きっと良くなるという強い励ましだったが、それが不思議に功を奏するのだった。彼女の励まし、力づけは、何かの理論に基づくものではなく、彼女の心から自然に、自発的に生まれたものである。エリザベスは、いつの間にか、のちに心理療法が扱うようになる営みに触れていた。

そして彼女が治療者としての実践に本格的に踏み出す機会がやってきた。一九〇〇年、二〇歳の頃の出来事である。[19] ある日、エリザベスはシャンプーパーラーで髪を洗ってもらった。帰ろうとしていた彼女は、店の様子がおかしいのに気づいた。見ると、一人の客が、予約をしたのにマッサージ師が来ないと激しく怒っていた。自信があったのだろう、エリザベスは騒ぎに割って入り、「私がしてもいいですよ」と言った。マッサージが始まってものの数分経つと、客はすっかり心地よくなって、マッサージの技術を褒め称え、翌日のマッサージを予約したばかりか友達まで連れてきた。こうして彼女は、思いがけなくもマッサージを生業とするようになっていた。そして、マッサージをしながら、百科事典販売ですでに培った心得で客の悩みも聞くのだった。「癒し人」としての歩みがここに始まった。

エリザベスは、若くしてロマンチックな恋を経て、チャールズ・ケネス・ヘイウッドと結婚する。[20] そして一九〇一年八月一四日にマーガレットを出産する。おそらくチャールズの仕事の都合であろう、その頃彼女は、アラバマ州、バーミンガムに暮らしていた。[21] しかし、マーガレットが生まれる頃にはすでに結婚生活に不幸の影が差していた。ロマンチックな感情が冷えると、チャールズはエリザベスに暴力を振るうようになったのである。仕事が行き詰まると、二人はマーガレットを連れてイリノイに戻る。

マーガレットが四歳になった頃、二人は離婚を決意し、誰がマーガレットを育てるか決めるためにシカゴで家族会議が開かれた。エリザベスの親族は誰もおらず、叔父、叔母、チャールズと、皆がエリザベスを激しく攻撃していた声をマーガレットはテーブルの下で聞いていた。マーガレットはのちにこの場面を夢に見て夢の中で父親を刀で切り刻んだという。そのうち叔父のハリーがマーガレットを散歩に連れ出して、帰ってみると母はもういなかった。マーガレットはチャールズの両親の家に預けられ、この時を最後に父親とは二度と会うことがなかった。[22]

ＤＶ家庭から離れたマーガレットは、安定した住処を得たかに見えた。しかし安心する間もなく、祖父からの性暴力が始まる。両親の離婚と母の入院は、マーガレットに、ＤＶへの曝露に加え性暴力被害の傷を残したのである。同様の虐待を受けたエリザベスの経験がマーガレットにも反復されたことになる。マーガレットは母親が死んだものと思い込み、死んで母の元に行くことを望むようになった。

エリザベスは、元々背負っていた心の傷に夫からの暴力が加わったためであろう、長期にわたる入院生活を余儀なくされた。二年間の入院生活を経てようやく退院することができた彼女は、預けられているマーガレットの元に向かった。その時六歳になっていたマーガレットは、母が現れたときのことをよく覚えている。突然現れたエリザベスは、略奪するようにマーガレットを奪い返し、二人で逃亡した。以来、エリザベスは、マーガレットを守ることを生きがいとして母一人子一人の生活で彼女を育てたのである。

心理療法家、エリザベス・サヴァーン

エリザベスの臨床実践は、こうした転機を経てまもなく、本格的な段階に入る。一九〇八年、自身が二九歳、マーガレットが七歳になる年である。彼女は、テキサス州のメキシコ国境に近い町、サンアントニオで、治療オフィスを持つ。残されている広告[23]には、顔写真とともに「エリザベス・サヴァーン　メタフィジシャン」と書かれている。すでに彼女をエリザベス・サヴァーンと呼んできたが、実は、この名前を彼女が名乗り始めたのはこの頃のことである。治療者として立つことを決め

たとき、彼女は両親に与えられた名前を捨てた。サヴァーンという名は、ウェールズに源流を持ちブリストル海峡へと流れるイギリスのサヴァーン川から取ったものと推測されている。[24] メタフィジシャン metaphysician とはふつう形而上学者、つまり哲学者のことだが、ここでは臨床的メタフィジシャンのこと、つまり神秘的な力で癒しをもたらす治療者のことを指している。広告は次のように謳う。

メタフィジシャン　エリザベス・サヴァーン

（エリザベス・サヴァーンは）あらゆる面で健康、幸福、成功を私たちの手にもたらす原理を効果的に実践に生かします。心の徹底的な研究によって、サヴァーン女史はオカルトの深い学徒となりましたが、実践を真実に基づかせるための科学的姿勢を維持します。[25]

こうして彼女は、心の探求者と自らを位置づけ、オカルト（神秘学）と科学を原理とする治療者となった。マッサージ師という身体への施述のかたわら心に働きかけてきたそれまでの実践に区切りをつけ、心を治療の中心に据えたのである。これは彼女の歩みの前進を意味するが、身体への施術の経験は、その後も彼女の実践を深く支えることになった。こうして、マーガレットが学齢期に入ってからのエリザベスは、治療者として身を立てて、マーガレットを養ってきた。

そしていよいよ「心理療法家」を名乗る時が来る。一九一一年、エリザベスは自身を、「エリザベス・サヴァーン博士、サイコセラピスト」と名乗る。[26] 博士と名乗るだけの教育も、そもそも大学教育も経ていない彼女がそう名乗るのは、今日であれば、また当時でも、経歴詐称と言われても仕方がないが、自身の経験と知識がそう名乗るのに十分という自負を持っていたのだろう。[27] また、彼女は決して持って生まれた感性と経験だけで実践を行なっていたわけではなく、多くの書籍を読み、勉学を重ねていた。また学術書を読みこなす知力が彼女にはあった。[28]

心理療法家としての自身のキャリアのためか、マーガレットのバレエレッスンのためか、一九一一年ごろに二人はロンドンに移る。[29] ロンドンでの開業を経てエリザベスは、一九一三年に、最初の著作を出版する。『心理療法―その理論と実践』[30]である。「理論」を表す英語はふつう theory だが、ここでは doctrine というやや堅苦しい、大仰な言葉が用いられている。これが時代によるものか、エリザベスの好みによるものかわからない。表紙には堂々と博士（Ph.D）の資格が掲げられている。サイコセラピストになって以来、彼女は常に自身を博士と名乗っていた。

この本は、彼女の予想を超えて売れ、翌年一九一四年に第二版が出版された。同年の第一次世界大戦勃発を受けてアメリカに帰国したため、どの地で書かれたものかはわからないが、第二版へのまえがきにエリザベスはこう書いた。

はじめて著作を出版してから数ヶ月で本が売り切れるのはどの著者にとっても大いなる満足に違いないでしょうが、打ち明けますと私のその感情には人並み以上のものがあります。なぜなら、この本で私は、心理療法を新たな視点から前進させようと努めたのですし、私が恐れず考えたことはとりわけ私の独創だからです。

そして続けて、この出版をはじめてのロンドン滞在中に実現したこと、新しい地に受け入れられたことを喜ぶ。彼女の本を出版したのは、ウィリアム・ライダー・アンド・サンという創立間もないロンドンの出版社である。オカルト系の出版社を買収しての創立だったことから、ブラム・ストーカーの『ドラキュラ』の新装版など、意欲的な出版活動を行なっていた。日本でもかつて、心理学とオカルトが並行してブームとなった時代があった。厳密な科学を志向する心理学者からすれば困った傾向かもしれないが、心への関心は、「精神世界」「スピリチュアリズム」から、さらにはオカルトに至るまでへの関心と共存しやすい。エリザベスの著作がそのような出版社に受け入れられたのも、スピリチュアルなものに関心のある読者に受け入れられるという予想からだったのではないか。

バレエダンサー　マーガレット・サヴァーン

エリザベスが心理療法家として地位を確立していく期間は、マーガレットがバレエを始め、それを天職と見定めていった期間と重なる。

マーガレットがはじめて踊りへの情熱を自覚したのは、まだ彼女が祖父母と暮らしていた時代である。[31] ある嵐の夜、マーガレットは雷鳴や稲妻と共に踊り、自らの感情が解き放れる恍惚感を経験する。後に彼女は、それがダンサーとしての自己の発見であったと振返った。

ようやく安全な生活を手に入れたマーガレットは、七歳の時に観たバレエに魅了され、バレエダンサーになることを決意する。エリザベスは彼女の夢を叶えるために治療実践から得た収入をつぎ込んだ。はじめて舞台でソロを踊ったのは、コロラド州デンバーに暮らしていた八歳の年である。一〇歳になると、エリザベスとともにロンドンに渡り、ロイヤル・オペラハウスのバレエ・マスター、エドワード・エスピノーザに学んだ。ロンドン滞在中に彼女は、一九〇九年パリのシャトレ座公演で圧倒的成功を収めていたディアギレフ率いるオペラ・リュスの公演で、ニジンスキー、カルサーヴィナ、パーブロヴァなどの伝説的スターの踊りを見て魅了された。[32] 一三歳になる一九一四年にアメリカに戻った彼女がはじめてプロ公演の舞台に立ったのは、一五歳の年のメトロポリタン歌劇場オペラ公演のバレエシーンだった。同年には、ロサンジェルスでモダンバレエの実験的活動を始めていたデニショーン[33]の公演にも参加した。この時期彼女は、ダンサーとしてのキャリアを築くために、キャバレーやナイトクラブ、そしてブロードウェー・ミュージカルのダンスシーンと、あらゆる機会を見つけて踊った。

十代にしてプロとしてのバレエダンサーとなったマーガレットは、母親と離れて暮らすことが多くなる。二卵生双生児のように結びついていたエリザベスとマーガレットである。二度目に体験する母との分離体験はマーガレットを不安定にした。毎夜の夢に苦しめられたマーガレットは、手紙でエリザベスに苦しさを訴えている。手紙で心理療法を行う経験がエリザベスにはすでにあった。エリザベスの返答は母親としての便りを超え、自ずと手紙療法の色彩を帯びた。後年ニューヨークで同居するまで、二人の間にはおびただしい数の手紙が交わされる。それらはマーガレットの「一人でいること」[34]の苦しさを緩和し、キャリアを積む彼女の歩みを支え続けた。

マーガレットの「治療」の一側面を知らせる記述が『自己の発見』にある。[35] 兄の存在など明らかにマーガレットと一致しない少女の事例だが、修正を加えた自身の経験を同書の事例に組み入れていることを考えると、[36] 少女と母親の関係にマーガレットと自身のことが映し出されている可能性は高い。少女は、母親がサナトリウムに入院する間、マーガレットと同様、「不適切な人々の世話」を受けた。彼女の心はそれによって傷ついたが、当時それを表現するには自我が弱すぎた。そして、分析家によって表現を励まされてようやく子ども時代に母に向けて持っていた怒りを表現することができたと言う。

マーガレットもまた入院によって自分を捨て、祖父から性虐待を受ける運命に陥れた母親に対する怒りを持ったであろう。しかしその怒りは表出されることなく、おそらく彼女の踊りのなかに表現されていったに違いない。エリザベスは、分析家は、「困難の起源に関して患者の心に確信 conviction が得られるところまで、失われた記憶と感情を掘り起こし発掘していかねばならない」と言う。一九三三年の記述なので、マーガレットを「手紙療法」で支えていた頃にこのような理解を明確に持っていた訳ではないかもしれないが、少なくともこれを書きながら、マーガレットのかつての苦悩の起源に、母親からの見捨てられ体験に由来する絶望と怒りがあったことを意識していたに違いない。

ただ、マーガレットの場合、怒りを表現する対象が、その起源の母親当人であるとともに治療者でもあるという困難があった。このような二重役割は治療を錯綜させる要因になり、本来避けるべきである。マーガレットが心理治療を受けるなら、他の治療者を探すのが筋である。しかし私は、二つの理由でこの治療は必ずしも不適切ではなかったと考えている。まず、後のエリザベスのフェレンツィとの経験が教えるように、外部者としての分析家に治療を受けたとしても、治療者が実際の攻撃者になってしまうことがある。攻撃者像が治療者に投影される転移現象ではなく、

治療構造の性質がもたらす現実の攻撃としてである。二重役割のなかで治療を進めることは何れにしてもある程度必要である。第二に、当時エリザベスが他に良い治療者を見つけることはほとんど不可能だった。旅を続けるという実際上の問題と、このような過去のトラウマ体験に由来する問題を理解する治療者が当時いなかったことの両方の意味においてである。

マスク「ヒステリア」

バレエダンサーとしてのキャリアを模索していたマーガレットは偶然の機会にヴァディスアフ・ベンダ[37]というポーランド出身のアーティストが製作していたマスクに出会う。仮面をつけて踊る喜びを発見した彼女は、絵画の才能を生かしていっそうデフォルメを加えた自作のマスクを製作するようになる。一九二二年から展開されたマスクダンスは、彼女のシンボルとなった。マスクは、マーガレットのなかにある相容れないさまざまの感情、情動、情念を表現する媒体であるとともに、観客のそれらを掻き立てる媒体でもあった。[38]ダンサーとしての高い技術に支えられたその踊りから発せられる情念のほとばしりは観客を魅了した。活躍の場は広がり、彼女の写真は、『ヴォーグ』や『コスモポリタン』といった雑誌にも登場した。

行動の心理学

二人が帰国した頃のアメリカでは、フェレンツィも同行したフロイトの講演旅行によって精神分析が浸透しつつあった。心理療法の理論および技法としてエリザベスがいつどのようにして精神分析を学び始めたのか定かではない。しかし、旺盛な読書家であった彼女が、増え続ける精神分析関連の英語文献を読み込んでいったことは間違いない。そのなかには次第に英語に翻訳されていくフロイトの著作もあったし、パトナムのような精神分析の支持者による著作もあった。

精神分析も含む当時の心理学を幅広く吸収した成果を、エリザベスは二冊目の著作として一九二〇年に発表する。『行動の心理学―発達のための技法に注目した人格と行為の実践的研究』[39]である。頁を紐解くと、第一章「心の新しい諸側面――無意識の心理学」に始まり、第二章「知性――知覚の心理学」と進み、「想像力」「記憶」「意志」「情動」「感情」、「性」などの主題を順に扱って、第七章「自己――自我の心理学」で閉じられる。心理学の基本概念が並ぶこの章立ては、初期の心理学講義の一般的構成に近いと言ってもよい。しかし、多くの心理学テキストのなかにあって、この書の独自性は、間違いなく「無意識的過程」の重視にある。

「無意識」の概念の起源は、もちろんフロイトの精神分析にある。一九一〇年代中頃から二〇年代にかけてフロイトはメタサイコロジー論文を次々と発表し、精神分析理論の体系化を進めていた。では本書がフロイト理論に基づいた心理学書かと言えばそうではない。第一章を少し見てみよう。エリザベスは心理学の多様な領域に触れながら臨床実践が心理学にもたらした貢献に話を進め、「異常心理学」の意義からフランス、イギリスにおける初期の催眠実験、精神分析の誕生と発展過程を概観する。そして、次のように述べる。[40]

> 学生との私の個人的実践のなかでときに私は精神分析的な方法を用いて実験的な結果を得ている。ただし、それらの方法の実施がいつも、あるいはしばしば、開発者と同じ結論をもたらしたとは言えない。この領域の独立した実践家すべてがそうであるように、私は自分自身の技法を開発してきた。とりわけ種々の心的ないし身体的障害の緩和を目指して個人療法を行うとき、私の目的と意図からして私自身の技法がずっとよい結果をもたらした。とは言え、旧来の伝統的規範から勇敢に離れた彼らの理論がもたらしたインスピレーションは私たちのものである。もし私たちが人間の最も深い渇望とスピリチュアルな能力を理解しようとするなら、フロイト主義よりずっと先に進まねばならないと言いたいだけである。

エリザベスは、精神分析の価値を認め、またそれを学び始めていた。彼女の人生にはこの後、精神分析と本格的に交わる時代がやってくる。しかし、それに先立つ

この時代にすでに、「フロイト主義より先に進まねばならない」と彼女が言っていることは注目に値する。後の到達点における主張とほとんど違わないからである。そこには精神分析という特定の理論と技法への批判的視点があるのは間違いないが、どのような原理や方法論についても、その一つを自身のものとして選択することをしないのが彼女だった。およそあらゆる党派的なものから距離を置くと同時に、あらゆる理論や技法を折衷的に、統合的に取り入れる姿勢は生涯を通じて変わらない。無意識的過程の理解についても、その姿勢は同じである。

続く文章でエリザベスは、人間の心的生活における無意識 unconscious の意義を強調するが、それと並んで下意識 subconscious という言葉も用いる。そして、心の多元性、複数の断片に分裂する可能性[41]を述べ、「解離 dissociation への能力」が脱組織化 disorganization を引き起こして障害に導けば、分析と再組織化の仕事が必要となるという。「下意識」「解離」などの用語は、フランスにおける催眠学およびヒステリー研究に、特にピエール・ジャネによる研究に由来している。彼女がここでジャネの理論を下敷きにしていることは明らかである。[42] フロイトがジャネの下意識概念に学びながら「副次的」というニュアンスを伴うその語を避けて、「無意識」を自らの用語としたことはよく知られている。エリザベスが「無意識」と「下意識」を並べて用いるのは、明らかにフロイトとジャネの両者を視野に入れていたからである。続く各主題を論じる際、彼女はそのそれぞれについて無意識的過程を含んで記述する。いずれの場合も、精神分析の直接的引用ではなく、幅広い視野と自らの臨床経験に基づいて咀嚼した自身の言葉で語っていく。

ただし、その姿勢は決してエリザベス独自のものではない。ヨーロッパ発祥の力動精神医学をアメリカに導入した代表的医学者たちのうち、たとえばアドルフ・マイヤーやジェームズ・パトナムらもまた、精神分析の重要性を認め、多くのアイデアを取り入れながら、精神分析が次第に教条的になっていくことへの批判的姿勢を持っていた。エリザベスはこうした医学者たちの仕事も参照していたと思われる。実際、『行動の心理学』の副題が持つ「人格と行為」という言葉はマイヤーの心理生物学に由来するとも、ジャネに由来するとも言えるだろう。[43]

ジャネの思想は、統合的側面を強調するエリザベスの議論にも反響している。第四章「意志」の一部で彼女はこう言う。[44] フロイトの方法は、分析作業によって忘れられ抑制されてきた情動の絡まりを意識にもたらす意味で確かに重要な方法である。しかし多くの事例では、それに続いてバラバラになっていた要素の統合 synthesis が必要であると。

ブダペシュト滞在

独自の統合的立場を構築していたエリザベスは、二〇年代に入り、自身の症状の治療のために精神分析家を訪れ始める。正確にいつのことだったのか不明だが、スミス・エリ・ジェリフ、ジョセフ・アッシュ、オットー・ランク[45]を訪れている。

しかし、このようにアメリカを代表する当時の分析家の名前が並ぶこと自体、彼らによる分析治療体験のいずれにもエリザベスが満足できなかったことを表している。ランクがアメリカで実践を始めたのは二〇年代中盤であり、出生外傷の概念とともにある種華々しくアメリカの心理療法界に登場していた。エリザベスがアメリカ人の分析家たちを訪れて失望したのちに最後の望みとして訪れた可能性もある。そしておそらくはランクの紹介によって、最後にたどり着いたのがフェレンツィだった。一九二五年、彼女はフェレンツィをはじめて訪れた。[46]

フェレンツィとアメリカの接点は、一九〇九年のアメリカ訪問のほか、二〇年代に入って、ウィーンに滞在して精神分析を学んでいたアメリカ人グループへの講義経験もあった。しかし、ブダペシュトに滞在して分析を受けたアメリカ人となると、エリザベスはもっとも早い例の一人である。

はるばる訪れたフェレンツィによる治療に彼女は大きな期待を持っていた。はじめて会ったとき、フェレンツィの声は、堅苦しいアメリカの分析家たちと比べて「柔らかく甘い」もので、フェレンツィからの「深い個人的関心とをそれにともなう愛と喜び」を約束するもののように感じられた。[47] フェレンツィがのちの苦闘を予感させる強い印象をエリザベスから受けた様子はないが、すでに二冊の著書を持つ心理療法家として彼女がフェレンツィの前に登場したことは強調しておいて良いだろう。彼女の分析は、症状の改善を目指す治療でもあったが、治療者として自身を

探求する教育分析でもあった。

エリザベスは一九二五年七月九日に、「かつての花輪になお芳香を感じ取ってくださる方への感謝を込めて」という献辞を添えて、『行動の心理学』をフェレンツィに贈呈した。[48] 署名には「生徒 pupil」という言葉を使っている。エリザベスにとって分析は、すべての訓練生と同じく精神分析を学ぶ場でもあった。そしてその分析は今まで経験したものではなく、彼女が求めるあるべき精神分析である。これからフェレンツィとともに体験することと比べれば、今まで書いてきたものは、まだ芳香を残していたとしても、「人間の最も深い渇望とスピリチュアルな能力」の理解という目標からして道半ばに思えたのではないか。

それからしばらくの時が過ぎ、フェレンツィはニューヨークのニュースクールから招聘を受け、連続講義のためにアメリカに長期滞在する。一九二六年九月から二七年六月の帰国までの間に――どれだけの期間か不明だが――エリザベスもまたニューヨークに滞在した。フェレンツィは講義だけでなく、新しく患者となったアメリカ人の分析に忙しかったが、エリザベスも分析を受けていたと思われる。[49]

この滞在の影響は、ブダペシュトに滞在するアメリカ人の増加として現れた。[50] 連続講義や講演会を通じて、あるいはその地で始めた個人分析を通じてフェレンツィの力に魅了された人々が、ブダペシュトを訪れ始めたからである。そしてそれらのアメリカ人たちの交流にエリザベスも加わった。いつからか不明だが、マーガレットもエリザベスに会うためにブダペシュトを訪れ、アメリカ人グループに知られるようになった。ファッション誌にも取り上げられたマーガレットの美貌はブダペストの精神分析サークルでも注目された。

マーガレットの肖像画

一九三一年にはブダペシュトの画家オルガ・ドルマンディ[51]の手によってマーガレットの肖像画が描かれた。オルガの姉がフェレンツィに学んでいたマイケル・バリントの妻、アリス・バリント[52]だったことから肖像画の話が出たのだろう。オルガの娘、ジュディット・デュポンは、母親がこの肖像画を描いている間、空いた手で母親に抱かれていた幼い日を覚えているという。[53]

マーガレットは、二八年まで仮面バレエダンス公演を継続した後、一九二九年にマーガレット・サヴァーン・ダンススクールをニューヨークのマディソン通りに開校した。彼女の経歴はその頂点に向かおうとしていた。

トラウマの発掘

エリザベスの分析は、通常の分析者-被分析者関係とはかなり異なった関係性のなかで進んでいった。それはエリザベスが独自の方法論と理論的理解を持った自立した心理療法家だったからである。ときにフェレンツィは実名で彼女に触れているが、いずれの場合も患者ではなく「同僚」としてである。[54] エリザベスはフェレンツィが行う分析について、技法についても理論的理解についても自身の経験に基づいて積極的に提案していった。その治療は共同作業であり、それも治療者と患者という立場の違う二人の共同作業ではなく、真の意味での共同作業だった。

共同作業は困難を極めたが、最も困難な要素は、過去のトラウマ的体験に由来する記憶の扱いであり、それに伴う解離への対処だった。まず、過去の体験の詳細な想起が目標となった。これはかつて第一次世界大戦中の戦争神経症患者に行った治療ですでに経験したフェレンツィの基本的方法論である。おそらく一九二九年の間のことであろう。[55] 過去の人生をたどるうち、エリザベスに凄まじい体験の記憶が断片的に蘇ってきた。父親によってもたらされた性虐待から殺人の目撃までの凄惨な経験の記憶である。しかし、それらの記憶に近づくと彼女はトランス状態に陥り、あたかもその場で出来事が起こっているかのように恐怖に覆われ叫ぶのだが、やがてトランス状態から覚めるとその出来事があったことを思い出せないのだった。除反応を繰り返すことでいつかは治癒すると信じるフェレンツィだったが、症状の改善は見られなかった。

遠い過去の外傷体験の治療的扱いは、フロイトも検討を重ねていた。「狼男」の症例がその主な舞台である。「狼男」という患者名は彼が子ども時代に見た夢の内

容からつけられたもので、実名をセルギウス・パンケイエフという。彼は、子ども時代の両親の性交場面の目撃体験を記憶として想起することができなかったが、フロイトは患者が語る人生史をもとに狼の夢を読み解き、遠い過去の出来事を再構成した。

しかしフェレンツィとエリザベスが直面していたのはその種の再構成とは異なる課題である。過去の体験が目の前に顕になっているにも関わらず、それを通常の意味で想起することができないのだった。この現象はしかし、エリザベスにとって、『行動の心理学』にすでに書いた解離の現象に違いなかった。幼少期のショック作用によって発生した人格の一部の分裂によって健忘が起こっているに違いなかった。エリザベスはその理解をフェレンツィに伝え、フェレンツィも同意した。[56]

しかし、このような理解は知的なものに過ぎない。何が自分に起こっているかを理解しても、分析セッション内ではまたもやトランス状態が発生し、覚めるとその内容を意識的に想起することはできないのだった。エリザベスは、その理由はフェレンツィ側にあると感じた。解離された内容、つまり被虐待体験を保存している子ども人格を統合するには、今まさにそれを受けている子どもを優しく受け止める人の存在が必要である。ところが治療者であるフェレンツィの態度はいわゆる中立的な姿勢で、頭で理解してはくれるものの、子どもの体験に寄り添うものとは感じ取れなかった。

エリザベスは、フロイトが提唱する標準的な精神分析技法にフェレンツィがこだわっていることを非難した。しかし、理由はそれだけとは思われなかった。何より彼自身の中にある何らかの障害が被害体験に寄り添うことを阻害していると彼女は確信し、その障害を解決するための分析治療を自分が行いたいと申し出た。エリザベスの粘り強い主張の結果、フェレンツィは、自身が分析を受けることをついに承諾した。[57]互いの分析を交互に行う「相互分析」がこうして始まった。

フェレンツィはこれをエリザベスの治療のために開始したつもりだったが、実際の進行は本人の予想を超えるものだった。[58]エリザベスからみた患者としてのフェレンツィは、数々の身体症状についての慢性的不安を抱えていたが、「秀でて高い倫理観と知性を備えた男性であり、人生についてバランスのとれた見方とごく平静な振る舞いを身につけていた」。しかし分析を進めていくなかで、神経症的な装いの背後にある精神病[59]がくっきりと見えてきた。フェレンツィは、彼自身が、そして他の人が考えていたような適応の良い均整のとれた人物ではなかったのである。

フェレンツィはある日突然、スウェーデンの劇作家ストリンドベリの劇、『父』について話し始めると、主人公の精神を病んだ息子になりきり、涙を流しながら、精神病院に収容されてからも私のことを思い出して欲しいと訴えはじめた。彼は本当にそうなると思っているようで、「拘束服をつけなければならないのなら母親にしてもらいたい」と哀願するのだった。フェレンツィの母親がヒステリックに息子を罵倒する厳しい母親だったことはすでに話し合われていたが、この再現によってはじめて、トラウマによって引き起こされた障害が今も彼のなかにあることが理解された。

こうしてそれまで隠れていた人格部とつながることでもう一つの、一層重大なトラウマ体験が見えてきた。六歳ごろの出来事である。子守を担当していた娘が、性欲に駆られてパートナーの身代わりにシャーンドル坊やを誘惑して性行為を強要したのである。彼は、ショックと恐怖を体験しながら、他方で欲望も刺激された。それは彼の年齢の限界をはるかに超えた体験だった。

これだけでも深刻なトラウマとなるに十分な体験だったが、さらに最悪の体験が続く。別のメイドが出来事の一部を目撃し、シャーンドルを責め、体罰を加えた。それだけではない。メイドの言いつけで知った母親からもさらに厳しく責められた。母親の怒りは行為を迫った娘ではなくシャーンドルだけに向けられた。まるで犯罪者のように罵られたシャーンドルは、自分が最悪の罪人で、母の愛と理解を受ける資格はもうないと思い知った。どうしようもないその現実を前にして彼は言わば壊れてしまった。陰気で辛辣な子どもになり、そして彼をそこに追いやった体験を忘れてしまったのである。

エリザベスに受けた分析のなかで彼はこの体験を思い出し、母からの侮蔑とともに、母の代わりに愛していた姉ギゼラからも軽蔑されたことを思い出した。幼い時期に性的刺激を受けた子どもは、早熟と見える性的欲求を持ちやすい。実際のところそれは早熟ではなく、大人から受けた行為によって引き出された性感に圧倒され

た結果なのだが。そしてそのことを理解できない子どもは、自分を「悪い子」と思ってしまう。実際シャーンドルは、昂じる性的欲求から自慰に耽溺しながら、母や姉に同一化してその自分を軽蔑する少年に育った。[60]

フェレンツィには、穏やかで親切な人格の背後に怒りと非情に彩られた強い攻撃性があるのと同時に、すべての女性に対する恐れがあるのをエリザベスは見出した。子ども時代に経験したのと同じ怒りと性的情熱を女性たちが持っていることへの恐怖である。この出来事から生まれた彼の精神病的部分には、激しい苦しみと、性に関する不信と、耐え忍ばねばならなかった不当な仕打ちへの憎しみが封印されていた。

では一体どうやって彼の人格はその経験にも関わらず全体としての健康を保ったのだろうか。おそらく出来事を全体としての心から消し去って、自己の外に置いたのだ。フェレンツィが使った言葉でいえば断片化に当たるとエリザベスは考えた。それはもちろん人格の歪みをある程度もたらしたが、自我を保存することを可能にした。幼いシャーンドルがそうやって秀でて知性、均衡、好意を備えた人として成長したことは驚くべき力である。ただ、そこには他者に対するある程度の危険性と、フェレンツィ自身の幸福と健康の生涯にわたる阻害が伴った。

幼少期のフェレンツィが経験した、大人による子どもの感受性への打撃、母親や子守などの養育者からの攻撃は、エリザベスが知る多くの神経症者に共通して見られるものだった。彼女は、精神障害の起源にはこうしたトラウマ的体験があるのを確信した。その確信は、自らがフェレンツィに受けた分析とフェレンツィに自らが行なった分析の両者に基づいていた。相互に行った分析の試みは、当時それを知る人がほとんどいなかった子ども時代のトラウマの作用を詳細に理解する作業をもたらしたのである。

分析の限界

こうしてエリザベスは、フェレンツィの助けを借りて自身の過去にあったトラウマ的出来事について理解を進めた。しかし、エリザベスもフェレンツィも、解離された人格部分を統合するには至っていなかった。

それぞれの「精神病的」部分についての理解は進んだ。自らの過去の体験も、少なくとも過去の事実の再構成という意味でははるかに進んだ。それでも解離された人格部分の統合という意味では、十分な成果が得られないのである。過去の記憶に触れればエリザベスはやはりトランス状態に陥った。フェレンツィは健康状態の悪化を訴えるようになり、それが人格の解離と関係しているように見えた。身体症状の心理療法の経験を数多く重ねてきたエリザベスだったが、フェレンツィの身体症状に改善をもたらすことはできなかった。

一九三二年という年がやってきた。エリザベスもフェレンツィも、新しい地平に辿りつかねばならないという決意を新たにした。フェレンツィは、エリザベスをはじめとする最近の治療経験を書き留め、理解を体系化し、さらにはフロイトの分析を批判的に見直して、新たな統合への道を発見するため、臨床日記をつけることを決意した。第一頁が書かれたのは一月七日である。以後、多くの頁がエリザベスとの経験から得られた理解で埋められていく。

エリザベスもまた、いつからかは定かではないが、フェレンツィとの体験から得た理解を一冊の本にまとめることを構想した。『自己の発見』である。

彼女は、『自己の発見』の第三章を精神分析に充てることにした。『夢解釈』から『快原理の彼岸』にまで触れながら、「無意識」を発見し、「夢分析」「自由連想」を技法として確立したフロイトの功績を彼女は最大限に高く評価する。「自由連想」によって患者は、それまで隠され光を当てられたことのない心の部分が現れてくるのを経験する。忘れられていたことを意識にもたらすこと、つまり「想起」である。失われていたあるいは解離されていた部分の発掘の過程はいわゆる告白の性質を持つが、ふつう考えられているようにその内容を罪とみなして許しに導くことが分析の目標ではない。目標はむしろ、自身を非個人的な観点から見極めることであり、現実を把握することである。

「解離」は、彼女が以前より重視し、さらにフェレンツィと共有していた概念だが、当時精神分析用語として一般に使われていなかった言葉である。彼女にとって解離は、精神分析実践で当然扱わなければならない現象で、それを含むものが精神

分析であった。フェレンツィにとっても、解離された記憶や人格部の統合は、当時の精神分析界に受け入れられないとしても、彼の考える分析実践の一部だった。

しかし、こうした理解をフェレンツィと共有しながら、エリザベスは『自己の発見』を精神分析の書とは考えていなかった。フェレンツィとの分析を経験しながら、自身の心理療法を精神分析の枠内に収めることはできないと彼女は感じていた。まず方法論に限界があると彼女は考えた。精神分析は時間がかかりすぎる。すべての患者にときには何年にもわたる毎日分析を実践することは不可能である。それでは一人の治療者が持ちうる患者の数が限られてしまう。多くの人が恩恵を受けることができない実践であった。治療を受ける強い動機が患者になければならないところもある種の患者には限界である。

これらは治療の枠組みの限界である。しかし、彼女にとってより深刻な限界は、柔軟性に欠ける硬直性にあった。彼女からすれば臨床実践は、さまざまの患者に柔軟な臨床判断によって行われるべきで、治療に適さないという理由で患者を排除すべきではなかった。治療枠を厳格に保つがために患者の不満をすべて治療への抵抗とみなすことも受け入れ難かった。「常に患者が正しい」とはじめて言ったフェレンツィを彼女は評価した。知るものが知らないものを教える姿勢は不適切であり、共感が必要である。エリザベスはこう書く。「それを実践するには、並外れた思考の自由のみならず並外れた人間的な感情を要する。それは感傷でも泣くことでも同情でもなく、つまるところ、その最も高い意味での――愛である。」すぐ後に彼女は、この「愛」は「恋している」ことではない、恋は利己的なもので分析関係から排除しなければならないと付け加える。愛とは、寛容で慈悲深く暖かい、賢明な母が我が子に注ぐそれのようなものである。

フェレンツィが日記に記した言葉がここに反響し、逆にエリザベスのこうした考えを受け取ったフェレンツィがそれを日記に記した。二人の体験と思考は共鳴しながら展開していた。二人にとって、神経症患者は皆、ある意味、まだ情緒発達を遂げていない子どもであった。もちろん自ら自身も含めてである。

心理療法が本来備えていなければならないにもかかわらず、精神分析がそれについて語らない、スピリチュアリティ（霊性）を彼女は重視していた。いくら中立的な姿勢を保ったとしても、治療者は患者に直接の影響を及ぼすのであって、その影響は治療後まで長く続く。その影響の質は、治療者の持つスピリチュアリティによって決まるとエリザベスは言う。

言い換えれば、エリザベスが精神分析に見た限界は、「分析」にすべての努力を注ぐことにある。精神分析は、「統合する」過程、「育てる」過程が始まるところで終わる。繋ぎ合わせ、統合し、育てることが必要と彼女は考えた。フェレンツィとの相互分析はこのような理解をエリザベスにもたらしたが、実際の分析過程はまだまだ困難の連続だった。エリザベスの症状は治らず、フェレンツィの体調は悪化していった。

終わりへの苦闘

フェレンツィがヴィースバーデンの精神分析学会から一〇月に帰って以降の分析は、とりわけ苦難に満ちたものだった。学会と休暇でしばらく間隔のあいた分析を、フェレンツィは一方向の分析、つまりフェレンツィによるエリザベスの分析だけで再開した。他の患者に関する守秘義務から自由連想に制限をかけざるを得ない状況では、相互分析には限界があると考えたからである。しかし、その分析は無味乾燥で何の成果も得られなかった。エリザベスがフェレンツィ側に分析治療すべき問題があるのを深く理解してしまった以上、一方向だけの分析に戻すことは困難だった。またそれに加えて、フェレンツィもかつて以上に治療を必要としていた。

フェレンツィの体調はますます悪化した。フロイトからの支持を得られないことが明らかになった時期に身体の破壊、つまり悪性貧血を発症したことから、自分の人格の統一は、「上位の力」との同一化によってかりそめに得られていたのに過ぎない、解体しようとする心的組織を何とか持ちこたえている代償として器質的な身体組織の解体が進んでいると考えた。「自らの再調整」[61]をするためには分析治療が必要だった。

分析はまたもや相互的になった。再開した分析のなかでエリザベスは、自分が暴力的な父親像をフェレンツィに投影して抵抗していたことに気づいたが、他方でフェ

レンツィは彼女にとって気力が衰えていく無能な父親となってしまい、もはや訪れたときに持っていた「理想の恋人」を得る望みは途絶えた。エリザベス側から見てフェレンツィのもとで分析を続ける意味は失われつつあった。実際、エリザベスによるフェレンツィの分析の時間の方が長くなっていった。

マーガレットは親しく連絡を取り合っていたネダー（ロベルタ・ネダーホード）からの電話で、エリザベスが分析を受けておらず、フェレンツィの分析ばかりしている状況を知った。ネダーはフェレンツィに分析を受けるためにブダペシュトに滞在中のアメリカ人たちの一人である。一緒に滞在中の友人ナタリーにとってもフェレンツィによる分析が思わしくないことを聞いた。

この電話があった後、一九三二年一二月一四日にマーガレットは長い手紙を書いた。[62] 患者たちのこの混乱がフェレンツィの病のせいで、フェレンツィを気の毒に思うと書きながら、彼女は、エリザベスの分析の成り行きを心配する。何とか気持ちを抑えてしばらく書いていた彼女だが、一息いれるためにお茶を飲むあいだに怒りを抑えることができなくなった。私が今ブダペシュトにいなくてフェレンツィは幸運だ。もしいたら爆弾を仕掛けて火をつけるところだ。分析の終結を真剣に考えないフェレンツィは自己中心的で、患者でも友人でも分析家でもあるエリザベスへの思いやりがまったくない。一刻でも早い方がいい。ブダペシュトを離れなさい。こんな状況で耐えているあなたのことをフェレンツィは少しもわかっていない、ひどい、と締めくくった。

終らなければならないことはエリザベスもわかっていた。あとは終わり方の問題である。なんとか終結して、ここまで大変な症例――それはお互いのことである――を終結できたお互いの仕事を讃え合うことができればよいと思っていた。[63] 年が明けるとフェレンツィの体力にさらに衰えが見えた。それでも衰えが見えるがゆえに終わることがいっそう困難になり、ついにブダペシュトを離れることができたのは二月末だった。

癒しと統合

パリでエリザベスと再会したとき、マーガレットの目には彼女がひどく消耗しているように見えた。しかし、フェレンツィとの最後の日々を苦闘しながら、エリザベスは『自己の発見』を書き続け、ほぼ完成に近づいていた。それは彼女の気力、知力が決して見かけほど衰えてはいないことを意味した。マーガレットのアパートに滞在しながら、完成に向けた執筆が続けられた。最後の章のタイトルは「出口」である。[64] 副題には、「人間の心の可塑性と子どもの教育」とした。フェレンツィとの分析体験を経て、自立した心理療法家としての再出発を画す著作の最終章である。エリゼベスは、フェレンツィとの体験とこれからの人生に思いを馳せながら、この章を書き始めたことであろう。彼女のペンがまず書きつけたのは次の言葉である。[65]

宇宙的存在の一片としての、生きる創造力としての人間の心への畏敬の念が私のこの確信の基盤である。「出口」はある。人間の悲惨は大幅に緩和することができる、人間の可能性は大幅に増大させることができる。

苦闘の末に生まれた言葉は、第一著作のトーンと同じく、どこまでも肯定的である。子ども時代に持っていた可能性を多くの人はある時点で失い、実質的に死んでしまうと述べたしばらく後、こう言う。

冒険としての人生。「私は何を達成できるのか、私は何を発見できるのか、私は今まで見たことのない何を今日見ることができるのか。」私たちをめぐる無限すべてに向けて覚醒した真に生きる人が、純粋な喜びと関心から自身に問いかける問いはこれらである。

精神分析によって下（down）と後ろ（back）を見る仕事がまず必要である。それによって、初期の育ちの失敗の見直しをまずする必要がある。[66] その意味で精神分

析の知識は、神経症の成立を待たず、学校や幼児の養育の期間に予防的に用いるべきである。エリザベスは精神分析による人生史の探求の意味を最大限評価しながら、そこにとどまらず未来に歩み出すことの価値を説く。

千里眼 clairvoyant についても彼女は興味深いことを述べている。[67] 千里眼の能力を持つ人は、幼少期に何らかの傷を経験して、その傷に対して、前進的な対応をすることができた人である。心が壊れる経験をしてしまったのだが、ふつう心が持つ限界が壊されることで視野を拡大することができたのである。テレパシー的な現象への関心はフェレンツィも共有していた。彼は、アメリカ講演旅行で霊媒への関心をフロイトと共有しながら、フロイトからその話題を公表するのは控えるように釘を刺されていた。フェレンツィはフロイトの言葉に従って、論文にこの問題を展開することはしなかったのだが、エリザベスとの分析ではこの古くからの関心が再燃したようで、『臨床日記』に彼女とほぼ同じ理解を書き留めている。[68]

最後にエリザベスは、哲学的問いの重要性を強調してこの最後の著作を終わる。[69]

> 哲学者であることは、知を愛すること、純粋、独立、雅量をもって生きること、尽きぬ自然に精通することである。……この高みに到達するための鍵は自己のたゆまぬ修養である。知への愛である哲学と無限への扉である心の知の結合を表すために私が見出した最良の言葉として、心知 psychosophy を提案したい。私たちは心知という道を通って「自己の発見」に至るであろう――「わたしたち死んだものが目覚めたら」。[70]

科学者たろうとしたフロイトに対し、エリザベスは一貫してメタフィジカル（形而上的）なものの重要性を説き続けた。フェレンツィとの経験を通じて自らを分析家と考えながら、分析という領域を超えた理論や実践にもつながり続けた。フェレンツィはそれも精神分析の領域に包み込もうとしたように見えるが、エリザベスは分析も統合も、メタフィジカルなものもそれぞれの場所に位置づけながら統合しようとし、その全体を心知と呼んだ。

一九三四年に入ると、ナチス政権の圧力を背景にパリに騒乱が起こり、フランスの将来にも暗雲が立ち込めたが、久しぶりに二人で過ごすエリザベスとマーガレットにとっては「新しい始まり new beginning」にふさわしい年だった。エリザベスは前年に『自己の発見』を出版した喜びのなかで新しい年を迎えた。マーガレットには、ダンサーとしての新たな展開が待っていた。この年彼女は、イダ・ルビンシュテインの劇団に入る。

イダ・ルビンシュテインは、ロシア出身のダンサーおよび俳優で、ディアギレフのバレエ・リュスで、クレオパトラを演じてパリにデビュー以来、「姓を超越したすらりとした身体に黒い瞳と髪というエキゾチックな独特の魅力」[71]を武器に絶大な人気を博していた。一九一一年から自身の劇団を組織すると、ラヴェルが彼女の劇団のために作曲した『ボレロ』を、ニジンスカの振り付けで一九二八年に初演するなど、財力を利用して野心的な公演を展開していた。モダンバレエは、マーガレットも参加したデニショーンの活動も含め、アメリカに発祥し、その地で展開してきたが、[72] 正統的なバレエ教育を経ていないイダ・ルビンシュテインによる公演は、型式よりも情念を踊りに移すことを求めてきたマーガレットの嗜好にふさわしいものだっただろう。彼女が参加したのは劇団の歴史のなかで比較的遅い時期になるが、クルト・ヴァイルやストラヴィンスキーの名前が並ぶ公演への参加は、世界で最も前衛的な舞台芸術シーンに参加することを意味した。

エリザベスはしばらくのパリ滞在の後、ロンドンに移って心理療法の実践を再開する。[73] ロンドンは、心理療法家としての彼女を受け入れ、本の出版を引き受けた出版社のある地だった。ロンドン時代のいくつかの情報は、彼女が心理療法家として地位を確立し、精神分析家たちとも交流していたことを知らせている。[74]

一九三六年五月には、ニューヨークのカーレン・ホーナイから、十月にドイツからロンドンに移住する予定の娘、ブリギッテがロンドンに落ち着いたら会ってほしいという手紙を受け取った。[75] ブリギッテはドイツで活躍し、戦後はアメリカ映画に多数出演した映画俳優である。ホーナイはベルリン精神分析協会の創立時からメンバーとして活躍した分析家だが、一九三二年にシカゴのフランツ・アレキサンダーに招聘されてアメリカに移住し、一九三三年からニューヨークで分析家として活動していた。[76] ホーナイはしばらくのちに正統フロイト派から袂を分かち、新フロイト

派の一員となるが、ニューヨークに落ち着いた頃より、新フロイト派に名を連ねる事になるハリー・スタック・サリヴァンやクララ・トンプソン[77]と研究会を持っていた。トンプソンがエリザベスと同じくフェレンツィとの分析を終わって帰国した年である。

手紙の文面からは、この少し前にエリザベスがニューヨークに滞在してホーナイと会っており、ロンドンに向けて出発する際に挨拶状を送っていたことが読み取れる。娘の紹介からも、最後のエリザベスがニューヨークに戻ることを楽しみにする言葉からも、二人の間の信頼感が感じられる。ホーナイをアメリカに呼んだアレキサンダーもブダペシュト生まれの分析家である。まもなく欲動論から離れ、幼児期の対人的要因と文化的要因によって人格形成が行われるとするホーナイの理論にはフェレンツィとの親和性がある。フェレンツィ―新フロイト派の流れのなかで生まれたさまざまの交流のなかにエリザベスもいたのだろう。ホーナイがのちに追求した「真の自己」もエリザベスの「自己の発見」と共鳴していたのかもしれない。ちなみに、ホーナイはこの手紙を「彼女がロンドンに落ち着いたら、貴方とお嬢さんに会うことができますように」と括っており、マーガレットがエリザベスと同居していたことがわかる。パリでのダンサー生活を経て、マーガレットは現役ダンサーとしての活動を終えていた。エリザベスが五六歳、マーガレットが三四歳の年である。

その後、ヨーロッパの政治情勢は悪化の一途をたどり、一九三八年三月一二日にはナチス・ドイツによるオーストリア併合に至り、フロイトは娘のアンナとともに六月四日にウィーンを離れ、ロンドンに亡命する。エリザベスがフロイトに会うために連絡したためか、それとも元々交流があったためか、アンナ・フロイトはロンドンについてまもなくの八月二八日にエリザベスに手紙を書いた。マースフィールド・ガーデンズの家に落ち着くまでに滞在していた仮住まいからである。「（間にホテル滞在を挟んだあと）あと二、三週間のうちにもう一度落ち着きますので、その頃会いにいらしてくだされば嬉しいです。（20, Marsfield Gardens, N.W.3）」[78]。エリザベスがマースフィールド・ガーデンズの家にアンナを訪れたとき、フロイトも彼女を「とても手厚く迎え入れた」[79]という。エリザベスにとって、ロンドンで聞いたフロイトの死のニュースは感慨深いものであったろう。

晩年

一九四〇年代のいつ頃か、エリザベスとマーガレットは、アメリカに戻り、ニューヨークに落ち着く。マーガレットはダンス教師として活動し、エリザベスは、メトロポリタン美術館にほど近いパークアベニュー八七丁目で心理療法実践を続けた。晩年のエリザベスの写真は、ブダペシュトに滞在していた頃のそれと比べると見違えるような穏やかなエリザベスを写している。「まったくの挫折」に終わったフェレンツィの分析治療だったが、長期的に見るとエリザベスの症状は大きく改善していた。とは言え、一九五二年一二月二〇日、七三歳のときにアイスラーに受けたインタビューで彼女は分析終了の後のことを次のように語っている。[80]

> 私自身の分析について言いますと、最悪の症状のいくらかは緩和したり消失したりしました。自殺強迫と酷い頭痛も含まれます。ただ、情緒的にはまだ疲れ切っており、消耗させられる悪夢がまだありました。そして、それらから完全に回復したことはありません。

フェレンツィとの分析治療は「挫折」に終わったが、長く彼女を苦しめてきた症状は消えていた。自殺願望に苦しめられることはもはやなく、人生を楽しむことができた。確かにそれはフェレンツィとの分析治療の成果であった。症状はまだ残っていたが、著書でもインタビューでもエリザベスがフェレンツィの分析を批判したことは一度もない。彼女には、フェレンツィ個人の限界と二人が置かれた時代の限界、そして与えられた時間の限界がわかっていた。エリザベスはメタフィジカルなものへの感性に開かれていた治療者だが、その一方で科学の進歩を信じるモダニストでもあった。心理学や脳科学の発展による心理療法のさらなる進化にも期待を寄せていた。完全な回復のためには何かが足りなかったが、それはフェレンツィの失敗ではないとエリザベスは考えた。[81]フェレンツィはおよそ考えられる限りの手を尽

くしてエリザベスの治療に取り組んだ。二人が直面していた問題に科学的根拠を持って光を当ててくれる知識がどこを探してもないなかで、自身もフェレンツィに様々のアイデアを提供し、フェレンツィの治療にも取り組んだ。フェレンツィの女性関係にある種の歪さをもたらした原因を突き止めることもできた。しかし、分析を深めることで解離が解消されれば悪性貧血が改善するのではというフェレンツィの期待は裏切られ、彼の命を奪った。[82] 分析の成果を踏まえてお互いの治療の新しい地平に至る時間は二人にもはや与えられなかったのである。

晩年のエリザベス

アイスラーがインタビューのために彼女を訪れたとき、彼の前に現れたのは、フェレンツィを苦しめた「難しい症例」という情報から想像される女性とはまったく違う穏やかな成熟した治療者だった。[83] 手紙に残された患者との交流の記録からも、治療者としての彼女の力量と暖かな人柄を感じ取ることができる。[84] エリザベスは八〇歳でその生涯を閉じる直前までニューヨークのオフィスで実践を続けた。

スポットライトの記憶

ニューヨークに落ち着いてから双生児のようにして母と暮らしてきたマーガレットは、エリザベスの死によって一人残された。実のところ、華やかさや知名度の意味ではエリザベスよりもマーガレットの方が優っている。エリザベスは心理療法家として三冊の著作を残し、精神分析家のサークルにも、少しは心理療法家として、多くは患者として、知られていたが、医学や心理学の事典に名前が登場するほどの存在ではない。それに比べマーガレットの名前はウィキペディアや映画情報サイトに項目として存在し、晩年に撮られたマスクダンスの映像をYouTubeで簡単に見ることができる。

しかし、母娘の関係を考えると、マーガレットは常に母の娘だった。心理的に母の世界から出ることのないエリザベスの娘として生涯を送った。子どもを自立に導くのが親の役割だとすれば、エリザベスは母として娘の養育に失敗したのかもしれない。その一方で、すでに触れたように、エリザベスの境遇からして、また当時の治療の水準からして、むしろマーガレットの活動をそこまで支え成功に導くことができたのは、彼女の知力とレジリエンスの賜物であり、治療者としてのエリザベスの精進とマーガレットの才能が生んだ奇跡とさえ思える。

マーガレットは、自作マスクのデザインからも分かるように絵の才能にも恵まれていた。ダンスによる表現から引退すると、絵によってかつてのダンスを表現する試みも行いながら最後の住処にカナダのバンクーバーを選んだ。バンクーバーを選んだのは、一九二六年に公演旅行で訪れたときにその街と環境に魅了されていたからである。[85] いわば隠遁生活に入ったわけだが、彼女には残された仕事があった。自身の人生とキャリアを振り返り、形を与えて後世に残すことである。

一九八二年、マーガレットは、彼女を有名にしたマスクと彼女の踊りをフィルムに残したいと考えた友人、ペーター・リプスキスからドキュメンタリーフィルム制作の提案を受ける。完成した『ダンスマスク　マーガレット・サヴァーンの世界』に、私たちは、彼女の語り、マスク、若き日の踊りの映像、そして、「七九歳の私には踊りを再現する力はもはやないが、どんなものだったかヒントを与えるために」と断りながら踊られたマスクダンスを見ることができる。もちろん体の動きに若き日の躍動感はない。しかしフィルムにはたしかに「マーガレット・サヴァーンの世界」が刻印されている。マーガレットの踊りを見るうち、私たちは、踊りで彼女が表現しているものの起源がエリザベスと過ごした、あるいは過ごすことのできなかった幼い日々にあり、さらには世代を超えて彼女に伝えられたエリザベスの幼い日の体験にまで遡る可能性に思い至る。フィルム撮影が彼女の何かを突き動かしたのだろうか、一九八三年、マーガレットは自殺を図る。未遂に終わったその試みを知ったリプスキスは、自伝を書くよう彼女に勧めた。[86] それを受けて書かれたのが、三千頁ものタイプ原稿からなる『スポットライト』である。

マーガレットの仕事には最後の――しかも短くはない――一幕がある。一九八六年のことである。彼女は、地元バンクーバーのブリティッシュ・コロンビア大学で

開催される学会、「フロイト伝説との格闘」の広告を見た。そこに名前を発見した一人のカナダ人心理学者の連絡先を彼女は突き止め電話をかけた。バンクーバーに住み、当時フェレンツィに関心を持ち始めたばかりの若き学徒、クリストファー・フォーチュンである。彼が電話に出るなり、彼女はいきなり言った。「あなたはジェフリー・マッソンというやつにどうやって連絡を取ったらいいか知ってますか。文句を言いたいのです」と。フォーチュンは、数ヶ月前にマッソンの本、『真実の抹殺：フロイトによる誘惑理論の隠蔽』(87)を読み、エリザベス・サヴァーンに関心を持ったばかりだった。彼が答えるのも待たず、マーガレットは、その本がエリザベスについて間違いを二つ犯していると言った。「マッソンという男は一九二六年に書かれた肖像画を一ページ大で本に載せて、『エリザベス・サヴァーン夫人』とキャプションを付けています。その絵は母のではなくて私のです！」。さらに彼女は続けた。「その絵は私のアパートの壁にかかってます。貴方が来てみればわかります」と。第二の間違いは、マッソンがエリザベスをダンサーと書いたことだった。彼女は興奮していた。「私の母はダンサーではありません。床でステップをちょっと踏むことだってできませんでした。ダンサーだったのは私です。私はパリのバレエ・ルュスでニジンスカと踊りました！」電話の主が、フェレンツィの患者、エリザベス・サヴァーンの娘と気づき、しかもバンクーバーに住んでいることを知ったフォーチュンは、早速マーガレットのアパートを訪ね、それから一九九七年の彼女の死まで、一〇年にわたる交友が始まったのである。

マーガレットには、フォーチュンだけでなく、マッソンをはじめとする精神分析史研究者からインタビューを求める働きかけが続いた。しかし彼女はその多くを断り、引き留めるフォーチュンの言葉にも関わらず、エリサベスの手紙を遺言に従って焼却処分した。一つには約束を守ってエリザベスのプライバシーを守るためであろうが、それらの働きかけがすべてバレエダンサーとしての自身ではなく、母エリザベスへの関心によるものであり、さらに言えば、エリザベスへの関心でさえなく、フェレンツィへの、そして結局はフロイトへの関心によるものであることが彼女を傷つけたからではないだろうか。あえて言うなら、それもまた子どもへの関心に発した行為ではなく、大人の欲望で子どもを用いる（濫用 abuse する）行為であった。

本論ではエリザベスの生涯とマーガレットの生涯を絡ませながら物語を進めた。しかし、心理療法家としてのエリザベスの生涯が、フェレンツィの患者という役回りから独立して語るに値するのと同じく、バレエダンサーとしてのマーガレットの生涯と業績は、本来エリザベスとも精神分析とも切り離して、バレエ史の一幕として語られるべきものである。フォーチュンが出会った頃も、マーガレットは毎日バレエのレッスンを欠かさなかった。幼児期に天啓を受けて以来、彼女は生涯ダンサーであり続けたのである。バレエ史の素人である筆者は、基本的な間違いを犯していることを恐れながら、本論のもう一人の主人公、マーガレット・サヴァーンの物語を閉じることにする。

注

（1）本論は、拙著『フェレンツィの時代』（人文書院）に登場する重要人物――主人公フェレンツィを除けば、フロイトと並んで最も重要な登場人物――エリザベス・サヴァーン Elizabeth Severn（1879.11.17.-1959.2.13.）の評伝である。本論で触れるフェレンツィの治療は同書に記述するにふさわしい内容だが、本格的なサヴァーンの評伝がごく最近になって出版されたため慎重にならざるを得ず、間に合わなかった。本論は、その多くをアーノルド・ラックマン Arnold Rachman、ピーター・ルドニツキー Peter Rudnytsky、クリストファー・フォーチュン Christopher Fortune による記述に負っている。サヴァーンへのインタビュー記録とマーガレットの自伝など、重要な一次資料に筆者自身で当たっていないことは評伝としての限界である。しかし、筆者の現在の仕事状況からして、ニューヨークを訪問して一次史料に当たる機会は当分訪れないと思われる。二次史料で分かる範囲だけでも現時点で読者に伝えることに一定の価値があると判断した

（2）精神分析史研究者、William Brennan 氏の教示による。復刻版が発行されている一九三九年の時刻表に従えば、オリエント急行のパリ到着は一〇時一二分である。到着時刻の差が一九三九年と一九三三年のスケジュールの違いによるものか、当日発生した誤差なのか不明である。*Cook's Continental Timetable August 1939*. David & Charles, 1987.

（3）ハンガリーの首都の名前を筆者は「ブダペスト」と表記してきた。現在も行われている一般の表記にしたがってである。しかし、ハンガリー出身の精神分析家、マイケル・バリントの著作を日本に紹介された中井久夫氏は、ハンガリー語の発音に近い「ブダペシュト」の表記を用いていた。筆者もかつてそれにならったことがあるが、違和感を指摘されてその後慣例に従ってきた。しかし、『フェレンツィの時代』の刊行後、ハンガリー史専門家から、現在ではハンガリー語の発音に近い表記が基本という指摘を受けた。バリントやフェレンツィの祖国ハンガリーへの親近感から「ブダペスト」の表記に違和

感を覚えていたため、指摘に勇気を得て本稿では「ブダペシュト」と表記する。

（4）Margeret Severn（1901.8.14 – 1997.7.7）本論で紹介するマーガレットの生涯は、Rachman, Chap. 9, pp. 89–108 と、彼女の友人のドキュメンタリー映画作家、Peter Lipskis が製作した映画、『ダンスマスク：マーガレット・サヴァーンの世界』による。以下、『ダンスマスク』と表記する。映画は YouTube で見ることができる。https://www.youtube.com/watch?v=QT3qQj56N_g 閲覧2019.12.30.

（5）以下、列車の運行に関する情報は、一九三九年番版時刻表に従う。到着時刻などの細部はともかく、曜日等の基本的な運行スケジュールは一九三三年から一九三九年までの間に変更がなかったと想定している。

（6）例えば以下の新聞の、一九三三年二月二八日付、第一面（括弧内は該当記事の見出し）。Budapest Hirlap（Kommunisták a utalt birodalmi gyűlés palotáiét.）, Ujsák（Gyűjtogatás elpusztította a német parlament palotáját.）.

（7）クリスティの執筆の下敷きになったのは、彼女自身の一九三一年の乗車経験なので、少し前の時期である。ジャネット・モーガン『アガサクリスティーの生涯 下』早川書房、五〇頁。

（8）リチャード・J・エヴァンズ『第三帝国の到来 下』白水社、二〇一八年、一三八―一六六頁。「ライヒスターク炎上」

（9）一九三九年の時刻表によれば、ブダペシュト-パリ間のオリエント急行には、ドイツを経由する便と、ザルツブルクの後、インスブルックを経てスイスに入り、チューリヒを経由してパリに向かうアールベルク・オリエント急行があり。前者が火、木、土、後者が月、水、金と、それぞれ週三便の運行だった。ここでは一九三三年も同様の運行と仮定して記述した。

（10）Arnold William Rachman, *Elizabeth Severn: The "Evil Genius" of Psychoanalysis.* Routledge, 2018, p. 232. 以下の注では同書を Rachman とのみ示す。

（11）フェレンツィ『臨床日記』みすず書房、二〇〇〇年、三一頁。以下同書を『日記』と表記する。

（12）『フェレンツィの時代』二一五頁。

（13）Rachman, p. 228.

（14）Elizabeth Severn, *The Discovery of the Self,* Rider & Co., 1933（Routledge, 2017）.

（15）Rachman, p. 116.

（16）B. William Brennan, Decoding Ferenczi's *Clinical Diary*: Biographical Notes. *American Journal of Psychoanalysis,* 75, 2015, 5–18.

（17）彼女が抱えていた症状については、拙著『フェレンツィの時代』第一章を参照。

（18）"rather dull" Rachman, p. 89

（19）Rachman, p. 117–118. このエピソードと結婚の前後関係は定かでない。

（20）Charles Kenneth Heywood. Rachman, p. 90.

（21）マーガレットの出生情報による。

（22）ここに記したマーガレットの体験は、Rachman, p. 95. に引用されているマーガレットの自伝、『スポットライト：母への手紙』*Spotlight: letters to my mother*、ドキュメンタリー映画でのマーガレットの語りによる。彼女は、『スポットライト』を出版するため数々の出版社を当たったが、残念ながら引き受ける出版社は現れなかった。原稿は現在、リンカーンセンター内のニューヨーク公立舞台芸術図書館に所蔵されている。Margaret Severn, *Spotlight: letters to my mother.* New York Public Library for the Performing Arts, New York.

（23）Rachman p. 120.

（24）同、p. 90.

（25）同、p. 119.

（26）心理療法家としてのエリザベスについては、次の文献による。Rachman, p. 119–128.

（27）Rachman の推測。p. 119.

（28）後年マーガレットがインタビューの中で語った母親評は、「私の知る限りもっとも知性の高い人」である。Rachman, p. 96.

（29）ドキュメンタリー映画でのマーガレットの語りによる。ロンドンにおけるエリザベスの開業については情報が乏しい。

（30）Elizabeth Severn, *Psycho-Therapy: Its Doctrine and Practice.* William Rider and Son, 1913/1914.

（31）マーガレットは、ある嵐の夜に、雷鳴と閃光と一体になって踊りながら体験した恍惚を『スポットライト』に書き、また自身その一部を読み上げるフィルムでも語っている。彼女はそのとき、周囲の人々よりも「炎」「大地」「水」「空気」などと一体になることができる自身を知り、それが二〇年後に、激しい情動をステップに変える自らのスタイルの原点であったと言う。Rachman p. 97.

（32）おそらく一九一一年一一月三〇日のロイヤル・オペラ・ハウスでの公演であろう。

（33）Denishawn. ルス・デニス Ruth St. Denis とテッド・ショーン Ted Shawn によるダンス活動の名称。まずダンス公演がデニショーンと名づけられた後、一九一五年に設立したダンス学校も後に「デニショーン・スクール」と名づけられた。一度歴史のなかに埋もれたが、一九八〇年ごろからアメリカにおけるモダンバレエの起源として再評価されるようになった。Jane Sherman, *Denishawn: The Enduring Influence.* Twayne Pub, 1983.

（34）フェレンツィによるトラウマの核となる経験を表す言葉。『日記』一五九頁。

（35）*The Discovery of the Self,* p. 71.

（36）別のページには、明らかに自身を患者として記述していると思われる事例報告がある。*The Discovery of the Self. P.107.* Peter L. Rudnytsky, Introduction, In. Elizabeth Severn, *The*

Discovery of the Self, Routledge, 2017, p. 14.

(37) Władysław T. Benda（1873-1948）

(38)『ダンスマスク』

(39) Elisabeth Severn, *The Psychology of Behaviour: A Practical Study of Human Personality and Conduct with Special Reference to Methods of Development*. New York, Dodd, Mead and Company, 1920.

(40) 同、p. 13.

(41) 同、p. 22.

(42) ピエール・ジャネは、フロイトに先立ってアメリカを訪れており、一九〇六年にジェームズ・パトナムの企画によってハーバード医学校で行った英語講義が、『ヒステリーの主症状』として一九〇七年に出版された。エリザベスがこれを手にしていた可能性は高い。Pierre Janet, *The Major Symptoms of Hysteria*. Second Edition, The MacMillan Company, 1920. 第一講「ヒステリーの問題」でジャネは、ヒステリーを研究する目的は医療実践のためだけではないとする。「最も偉大な信念が広がるには確かに驚くべき現象によって引き起こされた情動の手が必要であり、それは常にヒステリー的な人々によるものであった」（p. 8）のである。偉大な宗教家たちがその例であり、彼によれば、人間の歴史を理解するにはヒステリーを理解しなければならない。心理学における「異常心理学」の意義を強調するエリザベスの議論に通じる。

(43) この影響関係についてはさらに詳細に検討が必要である。ここでは粗い仮説として述べている。

(44) p. 257-258. Rachman, p. 131 も参照。

(45) 拙著『フェレンツィの時代』に登場する分析家たちである。

(46) 拙著では、彼女がフェレンツィに受けた分析期間の情報から一九二四年と推測したが、次の文献では一九二五年としている。後出の献本が最初の訪問時であったと考えてであろう。Peter L. Rudnytsky, Introduction. *The Discovery of the Self*, p. 6.

(47) エリザベスがのちにフェレンツィに語った内容による。『日記』一三七頁。

(48) Rachman, p. vi. に献辞の書かれた頁の写真が掲載されている。

(49) エリザベスの滞在場所は、焼却を免れた手紙の封筒から確認されている。

(50) ブダペシュトに滞在するアメリカ人たちの関係については、『フェレンツィの時代』第六章を参照。

(51) Olga Dormandi（1900-1971）公刊された書物にこの絵がはじめて掲載されたとき、著者のマッソンは一九二六年としているが、マーガレットは『ダンスマスク』で一九三一年だったと語っている。Jeffrey Masson, *The Assault on Truth: Freud's Suppression of the Seduction Theory*. Atheneum, 1984.

(52) Alice Balint（1898-1939）

(53) Judith Dupont（1925-）一九二五年九月二二日生まれの彼女が覚えていることからも一九二六年とは考えにくいが、片手で絵筆を使いながら抱えることができたことを考えるとマーガレットの言う一九三一年の信憑性も疑われる。デュポンは、母と小説家の父、ラディスラス・ドーマンディとともに一九三八年にフランスに亡命し、精神分析家として『臨床日記』の編集などフェレンツィの遺産の保存、紹介に多大な貢献を行った。

(54)「リラクセイション原理と新カタルシス」一一七頁、「大人との子ども分析」一三〇頁。フェレンツィ『精神分析への最後の貢献』岩崎学術出版社、二〇〇七年。

(55) 一九三二年八月八日の日記に、「三年ほど前に健忘の発見」とある。『日記』二八一頁。

(56) フェレンツィは、一九二九年八月にオックスフォードで開催された第一一回国際精神分析学会でこの理解を報告し、エリザベスの報告に負っていると述べた。「リラクセイション原理と新カタルシス」一一七頁。

(57) フェレンツィ側から見たこの経緯はすでに書いた。拙著『フェレンツィの時代』第一章、第七章。

(58) フェレンツィという「患者」の治療過程は、『自己の発見』に報告されている。彼女が症例に触れるときにいつもするように個人が特定されないような変更を加えながらである。*The Discovery of the Self*, p. 96-99. Rudnytsky, Introduction, pp. 1-20.

(59) この理解をビオンの「人格の精神病的部分」の理解と照らし合わせることは興味深い作業だろう。また、現在であれば解離のメカニズムで理解されるであろうこの状況を「精神病」と呼ぶエリザベスとフェレンツィの理解が、どのような伝聞ルートを辿ってか、アーネスト・ジョーンズに伝わり、のちに彼が『フロイトの生涯』のなかでフェレンツィが晩年精神病で人格が破綻していたと書いた根拠になってしまった可能性もある。フェレンツィの方もエリザベスのことを「統合失調症 schizophrenia」としているが、この場合も今日の診断基準で言う統合失調症ではなく、解離の文脈で理解すべき状態と考えられる。

(60)『日記』三一〇頁の内容に若干の推測を加えて記述した。

(61)『日記』三〇九頁。

(62) Rachman p. 225-227.

(63)『日記』三一一頁。

(64) 実のところ、どの章がどの時期に書かれたかを示す資料はない。ここでは最終章をパリで書いたものと仮定して記述した。内容からして出版に至る最終段階で書かれた可能性が高い。

(65) p. 137.

(66) p. 138.

(67) pp. 141-142.

(68) p. 295, p. 300.

(69) p. 149.

(70) *When We Dead Awaken.* ノルウェーの劇作家、ヘンリック・イプセンが書いた最後の戯曲のタイトル。

(71) 薄井健二バレエ・コレクション　世紀末パリに咲いた仇花〜イダ・ルビンシュテイン、兵庫県立芸術文化センター。http://www1.gcenter-hyogo.jp/ballet/contents/standing/vol06.pdf　2019.12.26閲覧。

(72) 鈴木晶『踊る世紀』新書館、一九九四年。

(73) Rachman, p. 230.

(74) Karen Honey, 1985-1952.「ホーナイ、カーレン」、『精神分析事典』岩崎学術出版社、二〇〇二年、五五〇頁。

(75) Rachman, p. 234.

(76) Franz Alexander (1891-1964). ブダペシュトに生まれ、ベルリンで訓練を受けて分析家になったのち一九三〇年にシカゴに移住した。

(77) サリヴァンとトンプソンについては、『フェレンツィの時代』第六章を参照。

(78) フロイトは九月三〇日にその家に移った。*The Diary of Sigmund Freud 1929-1939.* The Freud Museum, London, The Hogarth Press, 1992, p. 249.

(79) Christopher Fortune, Thwarting the psychoanalytic detectives: Defending the Severn Legacy. *The American Journal of Psychoanalysis,* 75, 2015, 19-28. フロイトが落ち着いたマースフィールド・ガーデンズの家には、面会を希望する訪問者が絶えなかった。その多くはアンナ・フロイトかメイドが対応して帰したという。表敬訪問をした若き日のウィニコットは会うことができなかった。Brett Kahr, *Coffee with Freud.* Karnac, 2017, p. 46.

(80) Kurt Eissler, Interview with Dr. Elizabeth Severn, December 20, 1952. Container 121. Sigmund Freud Papers, Sigmund Freud Collection, Manuscript Division, Library of Congress, Washington, DC., p. 24. Rachman, p. 231, p. 236.

(81) ここに記したエリザベス・サヴァーンの思いは筆者の推測である。

(82) 悪性貧血はビタミン B12 の欠乏によることがその後明らかになった。慢性的胃炎に起因することから、フェレンツィ自身の見立ての通りトラウマによるストレスと関係する可能もあるが、現在は身体医学によって治療可能となっている。これもまた時代の限界であった。

(83) Rachman, p. 231.

(84) Rachman, pp. 235-236.

(85) バンクーバー選択のこの事情、そしてフォーチュンとの出会いに関する情報は、前掲、注(79)の文献による。

(86) Rachman, p. 89.

(87) 前掲書。注(51)。